

非文字資料研究

The Study of Nonwritten Cultural Materials



CONTENTS

第4回公開研究会報告

EBIKIー日本文化研究資料としての「絵引」ー……………2

研究エッセイ

「農漁民」は「半農半漁」を超えられるか……安室 知……………8

建築図面からみたわが国近代和風住宅の設計手法について……………10

……………内田 青蔵……………10

招聘レポート

日本に現存する中国宋代以降禅僧の頂相に関する調査報告……………張 新 朋……………14

都市生活中的日本传统戏剧……………潘 倩 菲……………16

無形文化遺産分類にみられる差異……………白 松 強……………17

ー中国と日本の比較を中心にー……………17

My First Research Trip to Japan……Jeongeun Park……………19

表紙写真資料解説……………20

派遣レポート

中国広東省の水上市民を訪ねて……………藤川美代子……………21

海外提携機関紹介

ハイデルベルク大学

COE (The Cluster of Excellence)

「グローバルな文脈におけるアジアとヨーロッパ: 文化の流れに見る非対称性の変遷」……………23

■2010年度センター・研究員・研究協力者……………24

■2010年度個人研究課題一覧……………24

■2010年度奨励研究者決定……………25

■受贈図書一覧(書籍・雑誌)(2009年7月～2010年5月)……………25

■主な研究活動……………27

■Information……………28

2009 年度
非文字資料研究センター 第4回公開研究会

EBIKI

—日本文化研究資料としての「絵引」—

日 時：2009年12月5日（土）13：30～17：00

会 場：神奈川大学 横浜キャンパス 17号館 215会議室

趣旨説明・問題提起：ジョン・ボチャラリ

司 会 進 行

(非文字資料研究センター 研究員 /
東京大学大学院総合文化研究科 教授)

報 告 者：中井真木

(非文字資料研究センター 研究協力者 /
東京大学大学院総合文化研究科 博士課程)

アレクサンドル・マンジャン (非文字資料研究センター 研究協力者 /
立教大学ランゲージセンター 教育講師)

君康道 (非文字資料研究センター 研究協力者 /
東京大学大学院総合文化研究科 専任講師)

コメンテーター：韓東洙

(韓国 漢陽大学校建築学部 教授)
(通訳：徐東千 東京大学大学院工学系研究科 建築学専攻)

福田アジオ (非文字資料研究センター センター長)

質疑・討論・総括 司会進行：ジョン・ボチャラリ



—編纂者から見た「Pictopedia」

そもそも英語にないもの、例えば日本家屋の建築用語、服装の名称など、をどうやって海外読者に理解しやすいように訳すかの悩み。また、現在の学問では認めがたい当時の研究水準に制約された解説はどうするかの悩みがあった。

—教育現場の視点

留学生向けの授業で利用してみたところ、その新鮮な驚きはこれからの EBIKI の活用に期待感を与えてくれる。



上衣・袖細・直垂
—絵引の「名付け」をめぐる—

中井 真木

本研究会主催者から報告者には、マルチ言語版『絵巻物による日本常民生活絵引』の問題点と活用法について意見を述べるのが求められた。正直なところ、原著にせよマルチ言語版にせよ、『絵引』について問題点を連ねるのは容易だ。模写時の省略や執筆当時の研究環境等に起因する絵画・文献解釈の誤り、時として難解な解説文、同じものに複数の語が、複数のものに同じ語が当てられている索引、他言語に対応する語のない場合の翻訳の処理、誤訳、複数言語間および翻訳者間の訳のばらつき等々(君康道「四脚」?「背の白い黒牛」?: オリジナル版『絵引』における「間違い」とマルチ言語版の編纂『非文字資料研究』23号、2010年1月参照のこと)。もちろん、絵巻から場面を切り取り、そこに見える事物に番号を振って名称を与え、索引化するという『絵引』の発想は極めて刺激的で、『絵引』は絵画を史料として利用する上で必ず言及される存在だ。だが、上のような問題点のために『絵引』をそのまま研究に活用することは難しい。研究会の報告でも、またフロアからも、こういった問題点の指摘や改善を求める声が多く出された。

しかし、このような問題点が『絵引』の価値を完全に損ねているとは思わない。たしかに、絵から言葉を引き、言葉から絵を引く工具としては不足かもしれない。が、眺めて発想を得る導きとしての『絵引』の魅力は失せていない。『絵引』にはさまざまな絵巻物類が取り上げられているが、それら絵巻物を片端から眺めることは、写真複製の入手が容易となった今でも骨の折れることであ

るし、そうしたからといって『絵引』で取り上げられている事物すべてに自力で気付けるわけでもない。もともと『絵引』には読み物としての工夫が見られ、『絵引』を読むことで、絵画に表現された中世の生活文化を全体的に理解し、同時に代表的な絵巻物に馴染むことが可能だ。マルチ言語版の刊行によって、日本以外の文化や絵画に造詣の深い研究者による『絵引』をきっかけとした新しい発見も期待できるだろう。このような視点にたち、一つの活用法として『絵引』を日本中世生活文化の入門書として利用することを提案した。

澁澤敬三は1954年の「絵引は作れぬものか」(新版『絵引』第一巻所収)で「これが完成すれば、古代絵巻にあらわれた履物全部を一応楽に眼を通し得るであろう」と展望を述べた。私もそのような資料があればどんなに有用だろうかと思う。しかし、考えてみればそれはデータベースが担うことであって、「字引」の類たる「絵引」の役割ではない。高精細のデジタル画像や電算化されたデータベースが身近である現在、絵引が目指す方向は絵画史料の総索引ではなく、事物の定義と優れた用例を示し、原典にあたる入口を提供する存在ではないか。『絵引』の凡例では「でき得べくんば原典にあたってもらいたい」と注しているが、現代こそ絵引で引き原典で確認する環境が整いつつある。権威ある辞書や事典の多くは最新の研究成果を取り入れるべく版を重ねている。『絵引』も定期的に版を重ねていくことを願う。

このような提言を踏まえて、本報告では『絵引』の有効活用、翻訳、改訂には、物に名称を与える「名付け」の再検討が必要であると考え、その一例として、上衣、袖細、直垂という一見類似する上半身の着衣につけられた名称を検証した。『絵引』総索引にみえる上半身の着衣の名称は五十を越す。登場回数も一回から三百回以上に渡り、形や着用者の性格が比較的明確なものもあれば、定義や使い分けがはっきりしないものもある。例えば、袖細はしばしば簡略な直垂の一種と定義されるが、一方の直垂も元来は庶民の簡素な労働着とされており、『常民生活絵引』の中でこれらを使い分けしているとすれば、かなり微妙な分類基準が想定される。加えて、直垂は原典の絵巻と同時代の文献に見えるが、袖細はより後代の語であり、併用してよいのかという問題もある。あるいは既刊の英訳では「上衣」を衣服形式と解釈し、他の衣服と同様に uwaginu と音写したが、それでよかったのか。今回、決定的な結論が導けたわけではないが、『絵引』で用いられる衣服の名称に「袖」を含む語が多いことか

趣旨説明・問題提起

ジョン・ボチャラリ



『絵巻物による日本常民生活絵引』は日本民俗学研究の重要な成果の一つである。この『絵引』の本文とキャプションを英訳し、さらにキャプションについては中国語、韓国語そしてフランス語に訳し、マルチ言語版として刊行することで、世界の人々に日本の民俗社会の豊かさを理解してもらい、また学際的研究に参考にしてもらうことは、神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」第1班「図像資料の体系化と情報発信」の狙い所であった。

『絵引』が「EBIKI」になったところで、日本文化研究資料としてどう見えてくるか、その外国語での資料を仕上げるにはどのような問題点があるかを中心に考えていくのは本公開研究会の目的であった。

その経緯などを簡単に紹介すると：

—神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」について

上記の「第1班」の他に、第2班「身体技法および感性の資料化と体系化」、第3班「環境と景観の資料化と体系化」、第4班「地域統合情報発信」、第5班「実験展示」、第6班「理論総括研究」の各分野に編成され、5年間にわたり研究事業を推進してきた。COEプログラム終了後、引き続いて神奈川大学の「非文字資料研究センター」として研究を進めてきた。

—「絵巻物による日本常民生活絵引」はどのような資料か

平安、鎌倉時代の代表的絵巻物を美術品としてではなく、一般の人々の生活を描いた資料としてとらえ直し、絵に描かれた事物にキャプションをつけることによって図像資料を「引く」ように配慮された研究書である。日本常民文化研究所が編纂したもので、全5巻で構成される。

ら、着用者の性別、階層、僧俗に配慮した上で袖に着目し、袖がないものは袖なし、短かいものは短袖、細いものは袖細、ある程度大きいもので、例えば胸紐が確認できるものは直垂、肌近く着るものは小袖というように分類されているという仮説を述べた。また上衣は、使用箇所共通点が多く、索引で「し」の項目に置かれ、類語として「下衣」が見えることから、「じょうい」と読み、種類が同定できない衣服に用いた名称と推定した。

これら『絵引』における名付けは、現在から見れば、すべて妥当とは言えない。が、何が妥当かは簡単な問題ではない。民俗学ならではの視点もあり、『絵引』の名付けを一つの学説として尊重した上で、厳しく批判する態度が必要である。

また、名付けの揺れは執筆者達の関心・環境の変転を反映したものであろう。例えば第二巻には「袖細」が出てこない。『一遍聖絵』の衣服の多くが直線的で大きな袖を持つために直垂とされている面もあるが、他巻で袖細とされているようなものは小袖としている。このようなばらつきは担当者の違いとして説明されるべきものかもしれない。河岡武春『「絵巻の会」のこと』（新版『絵引』総索引所収）によれば、「絵に番号を付す作業」は絵巻の会での話し合いと宮本常一の解説を斟酌して河岡が行なったとされており、本文からも解説を参照して索引を作ったこと、解説と索引の執筆者間に理解のずれがあることがわかる部分がある。このような情報とあわせて『絵引』の名付けを再検討することで『絵引』の編纂過程を探れば、民俗学や史料論の学史に寄与する点があろう。解説中には、すでに二十世紀前半の日本各地の風俗の証言となっている部分もある。澁澤敬三や宮本常一等が研究の対象となるにつれて、『絵引』そのものを史料として活用していく可能性も出てくるのではないだろうか。



図1



図2

同一図版内における袖細と直垂の使い分けの例（『日本常民生活絵引』第一巻 159 頁）。

図1の14は直垂、図2の9は袖細とされている。



穿袖の謎 —フランス語圏で絵引をどう使うか— アレクサンドル・マンジャン

以下で述べる理由から、宮本常一の研究を始点に「日本常民文化研究所」と「非文字資料研究センター」で『絵引』の翻訳を行うことは自然な成り行きであった。私は、フレデリック・ルシーニユ氏とアシスタント原麻子氏と協力し、『日本常民生活絵引』の仏語訳を担当した。

ここでは、『絵引』の内容の分析等ではなく、『絵引』の翻訳という作業そのものについて述べ、そしてフランス語圏における、本翻訳の意味を明らかにしたいと思う。ここでの私の目的は、翻訳の理論を作るのではなく、ただ私たちが経験した困難や問題をありのままに紹介し、そしてその企画をより広い観点から検証することだけである。

一. 翻訳の具体的な点から

まず、例から始めたいと思う。この発表のタイトルに挙げた単語の説明についてである。実を言うと、私たちはタイトル中の単語「穿袖」の読み方が分からない。音読みの「センシュウ」か「センジュ」、それとも訓読みの「うがちそで」か「はきそで」なのか。一体なんと読むのであろうか。索引に読み方は記されていないが、並び順から「うがちそで」だと判断できる。しかし、その索引を作った人は『絵引』を書いた人ではない。

『絵引』の実質的な執筆者は、編集者：澁澤敬三自身というより、アチックミュージアム（屋根裏博物館）のチームであった。そのメンバーの一人、宮本常一が60%程度—大半を執筆したと推測される。宮本常一は碩学であったが、平安時代の全ての専門用語のニュアンスを知っているわけではなかったため、時々「適当な」名称や新語や造語が現れるのである。「穿袖」はその一例である。

さて、なぜ翻訳者にとって、漢字の読み方はそんなに重要なのであろうか。実際は服装だからなのである。それは、単語が服飾用語＝専門用語または固有の名詞などであるという理由からなのである。（『絵引』という）

翻訳対象が服飾のみならず、仏教・動植物等さまざまな専門用語や固有の名詞で構成されており、それを正確に仏語で訳し、かつ、日本語での読み方を付記しなくてはならないからである。

この翻訳に着手する前に、我々は共通の翻訳のポリシー(Charter)を決める必要性を強く感じた。原文の説明を加える脚注を掲載してはならないという前提がある以上、原文が今の基準によると十分に科学的であるとは言いがたくとも、その翻訳はできるだけ科学的なものではないからである。

私たちのポリシーのいくつかの例を挙げたい。

例えば、

- (1) 服装の名称の場合、単語のローマ字表示、そしてその省略された定義（小定義）を載せる。
- (2) ある単語が二回出てきて、同じものを示す場合、その翻訳は同じであることである。つまり、ある単語の翻訳は途中で変わってはならない。
- (3) また、二つの単語の意味が非常に近いものであっても、違う仏語に訳する。
- (4) 明確さを目指しているため、たとえば、植物の名称がフランス語にない場合、そのラテン語の学名に、また、仏教関連の名称の場合は、日本語から梵語にというように、それぞれ変換して記載する。
- (5) さらに、仏語訳に特有の原則も決定した。例えば、章のタイトルでは、定冠詞を使うが、キャプションでは不定詞（つまり辞書形）の前「action de」(動作)をつき加える、などである。

そのような科学的な一貫性を必要としているのはフランス語圏の読者が特別だからだ。なぜこのようなプロセスが必要なのかと言うと、そのような科学的な一貫性を重視する、フランス語圏の読者の特殊性が背景にあるからだと思う。

二. フランス語圏における『絵引』の仏語訳

私たちがポリシーの必要性を感じた理由は、『絵引』の仏語訳の読者が一体誰であるのか、それを自問した結果なのである。

英語訳が対象としている読者が誰であるのかは分からないが、仏語訳の可能的な読者（仏語訳を読むであろう人）は、きっとフランス語圏（つまりフランスだけでは

ない）の一般人というよりも、学者の世界の人なのである。『絵引』を買う可能性が高いのは、まず大学の研究所だと思われる。ご存知の通り、フランス語圏における「郷土研究」のレベルは依然として高く、他の国々に比べて、その研究範囲に関する小論文は定期的な出版されている。しかしながら、日本の庶民の生活史に関する研究論文は少なく、使われている資料は主に筆記資料である。絵を歴史資料として使うのはまだ稀で、始まったばかりである。現在、私たちの作業を手伝ってくださっている校閲者のCharlotte von VERSCHUER教授やJean-Michel BUTTEL准教授は、フランスでそのような非文字資料を使って授業や研究をしていらっしゃるようである。

要するに、「郷土研究」や「民族学」「民俗学」研究レポートで一番使われている言語は英語、そしてフランス語なので、英語訳のほかに仏語訳があれば、『絵引』は世界中で広く知られるのではないと思う。

そう仮定すると、その読者の期待している翻訳のレベルは高く、近似を許せないものである。したがって、専門用語を使用しなければいけない場合は多い。例えば、建築用語の場合、「板」を「planche」と直訳するより、その板が縦板か横板かなどを区別して、ふさわしい専門用語で翻訳しなければならないと思う。そうすると、「板屋根」を直訳の「toit de planche」より、専門用語の「toit de bardeaux」と翻訳したほうが正確なのである。

もちろん、このような翻訳は、本来、専門家15人ぐらいのチームがフルタイムで行う仕事なので、伝統建築や平安時代の服装の専門家ではない二人のパートタイム翻訳者で完璧にできる任務ではないと言えるが、高い質を要求しながら翻訳しようと、日々真摯に取り組んでいる。

結論

『絵引』の仏語訳は、二人だけで短期間に仕上げなくてはならないという無謀とも思える厳しい任務であるが、きっと科学的な効果のある計画となると強く信じている。



絵引を探る —世界のEBIKI、あるいは Pictopediaへ向けて—

君 康道

神奈川大学 21 世紀 COE プログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」の一つとして進められたマルチ言語版『絵巻物による日本常民生活絵引』編纂刊行プロジェクトにおいて、私も英訳部分の編纂作業に関わらせて頂いてきた。その作業は歴史や民俗を専攻する英語に堪能な大学院生、あるいは英語を母語とする大学院留学生が翻訳を担当し、そこで訳された原稿を我々プロジェクトメンバーが校閲するという方法で進められたが、この方法は決して効率がいいとは言えず、我々プロジェクトメンバーも英語のネイティブは一人のみ、ましてや全員が『絵引』について精通しているわけでもなかったため、校閲はまさしく『絵引』を「探り」ながら一字一句対比検討する、という作業の繰り返しであった。そのため全 5 巻中第 1 巻及び第 2 巻の刊行で 5 年の期間を終えることになってしまったが、このような非効率的な手段を選んだことには大きな理由があった。それは① COE 事業推進目的の一つである「若手研究者の育成」のためであり、そしてもうひとつは②『絵引』は日本常民文化研究所が創設者・澁澤敬三から受け継ぐ貴重な「財産」であるため、なるべく愛情を持った関係者の手で作業を行いたい、ということからであった。その中でも特に②の「貴重な財産」という点には大きな注意が払われたところであり、『絵引』の価値を損なわないようにするため、一連の作業を進めるにあたり更に以下のような原則が設けられた。

- I 出来るだけ原文に即して忠実に翻訳する。
- II 絵引の絵を基本としながら、そこに描かれたものに妥当な訳語を与える。
- III 極力日本語をそのまま残さないよう、原文を適当な訳語に置き換える。

我々の目的は決して『絵引』の改訂版を編纂することではなく、あくまでその「マルチ言語版」を編纂することであり、上記の原則は当たり前といえば当たり前のことである。しかし実際にはこの原則に沿うが故、対処に頭を悩ませた問題は数知れなかった。解説文の内容が現代にそぐわず、そのまま訳したのでは読者に誤解を与え

てしまいかねない記述はどうするか、あるモノの訳語として必ずしもイコールではない語彙をそのまま充てて良いかどうか、更には全く適当な訳語がないモノをどう訳すか等々、問題にぶつかる度に我々は検討を重ねてひとつひとつ対処していった。

このように『絵引』を「探り」つつ校閲作業を進める中、『絵引』にはそれ自体における記述の「間違い」も多く含まれていることも判明した。これは『絵引』編纂・校閲時に絵巻の絵及び内容を再確認しなかったがために生じた問題だと思われるが、そうした間違いを修正するか否かについても、我々は大いに頭を悩ませた。記述内容に誤りがあれば正しく修正されるのが、学術資料としては当然の筋であろう。しかし万が一修正によって内容が変わり、その結果本来の『絵引』とは内容の異なる別物のマルチ言語版『絵引』が出来上がってしまったら、それは我々の目的と大いに反することになる。先にも述べたとおり我々の目的は「貴重な財産」たる『絵引』のマルチ言語版を編纂することであり、我々自身の解釈による新たな『絵引』を編纂することではない。更に加えて、マルチ言語版『絵引』はその名の通り英語の他、キャプションは中国語及び韓国語にも訳されることになっており、その作業もほぼ同時進行で進められていたため、英訳部分で記述内容はともかくキャプションを修正するということは、他の言語の翻訳作業にも影響を及ぼすということになる。そうした箇所が増えていけば作業に混乱を来す事は想像に難しくなく、その結果マルチ言語版『絵引』が一巻も世に出ることなく COE プログラムが終了してしまうことも現実を考えられることであった。こうした最悪の事態を回避する必要からも、マルチ言語版『絵引』の編纂においては結局のところ「間違い」にはそのまま目を瞑り、「原則」に従って「間違い」も「間違い」のまま原文に沿った訳が施されることになった。但し「間違い」と言ってもそれは敢えて意図的に残された「間違い」であるため、マルチ言語版『絵引』では各巻の凡例及び一巻巻頭の序文においてその旨の断りを付けて読者・利用者に注意を促している。

マルチ言語版『絵引』では「絵引」を「Pictopedia」と表しているが、これはもちろん既存の語彙ではなく、「Picture」と「Encyclopedia」を合わせた我々の造語である。マルチ言語版『絵引』編纂の目的は、その内容の紹介もさることながら「絵引」という手法そのものを広く世界に紹介することにもあり、敢えて全く馴染みのない「Pictopedia」という言葉を充てたことには、新

たなものを世に問うという意気込みもそこには多分に含まれている。これはもしかすると澁澤が「絵引」という言葉を生み出したときの思いに通じるものがあるかもしれない。そうした意気込みに対する評価や意見が徐々にこれから聞こえて来ると思われるが、その中には我々が思いもしなかったような見方や解釈、散々頭を悩ませた問題に関する明快な解決案、更には全く気付かなかった新たな発見などというものも出て来よう。それらはマルチ言語版『絵引』=『Pictopedia』だけでなく元の『絵引』にもフィードバックし得るものもあるはずであり、そうしたフィードバックを生かして、今後は今まで殆どなされてこなかった『絵引』そのものの研究というものも生まれてくる可能性も出てくるのではないだろうか。更にそれはまた、我々が目を瞑らざるを得なかった「間違い」を可能な限り正した、改訂版『絵引』の実現にも繋がるかもしれない。澁澤敬三から受け継がれる「絵引」が、「EBIKI」あるいは「Pictopedia」として世界に広く紹介されることは、世界の人文研究の発展に寄与することもさることながら、このように本来の「日本文化研究」そのものの発展にも非常に大きな意味があるように思われるのである。

現在非文字資料研究センターにて鋭意進行中である残り三巻のマルチ言語版『絵引』編纂プロジェクトに、私自身今後も微力ながら協力させて頂きたいと考えている。

以上の三つの報告について、韓東洙教授と福田教授よりコメントが寄せられた。韓氏は韓国における非文字研

究の在り方に触れながら、東アジア三国の民俗学研究にとっての「絵引」の重要性、高い応用性を指摘した。翻訳の難しさがあるものの、誤りを恐れるより、その成果を期待し、さらなる動力の必要を強調した。福田氏は COE の経緯を振り返って、『絵巻物による日本常民生活絵引』の資料としてのユニークさを語った。翻訳作業を通して海外の専門家だけでなく、一般の読者にとっても、日本文化の面白さを確認し、世界の国々のそれぞれの文化との共通性が分かるきっかけとなれば、との抱負を述べた。



福田アジオ氏



右：韓東洙氏 左：徐東千氏（通訳）

『絵引』の翻訳作業はある意味ではまだ未知なものである。今回の公開研究会によって、私を含め、すべての関係者にとって、今までの仕事を総点検し、完訳へ向かっての励みになることであろう。



質疑・討論



「農漁民」は「半農半漁」を越えられるか

安室 知 (非文字資料研究センター 研究員)

1. 生業類型としての「半農半漁」

海に接して立地する集落をこれまで歴史学の研究者はなんと呼んできたであろうか。生業に注目すれば「漁村」ということになるし、そうした生業の一面だけを見ることへの批判から「海村」といったりもする。また、立地に注目して「海付きの村」という場合もある。

最近、私は「海付きの村」という概念を用いることにしている。しかし、私の場合には、海付きの村という発想は、たんに立地として海に面していることだけを意味しない。また、発展段階的に漁村（漁業）に特化する前段階としての村を指すものでもない。

川名登らによる文献史学と民俗学の学際研究（川名ほか、1975）は、「漁村」とはいったい何なのか、といった疑問から出発しているが、それによる規定では「そこが海に面しているということでも、たんに魚がとれることでも、漁業生産の量の多少でもなく、そこに漁業生産があり、それが村落の構造に何らかの特質を付与しているとき、それを漁村という」とする。用いる用語こそ、海付きの村とは違い、上記のような考え方を筆者は基本的に支持したい。

これまで、漁業経済史や漁村社会学では書き上げなどに記録として残る生産高や納税（貢租）高をもとに、漁業生産と農業生産との割合または漁業への経済的依存度を指標として海付きの村の分類がなされてきた。そうした研究においては、漁村の一つの類型として「半農半漁」が位置づけられることが多かった。

たとえば、「海辺地方－主農従漁、端浦－半農半漁、本浦－純漁」（羽原、1954）や「純漁村部落、半農半漁村部落」（山岡、1965）、「純漁村、主漁従農村、半農半漁村、主農従漁村、純農村」（青野、1953）などがその典型である。そうした1950-60年代に確立した「半農半漁」の概念は、その後も行政文書はもとより、人文科学や社会科学において広く継承されている。

農林水産省で採用する「半農半漁村」の英訳は、a

farming and fishing village である（農林統計協会編、2005）。しかし、これでは定義としてもまた実態概念としてみた場合もほとんど意味をなしていない。社会経済史学や漁村社会学といった学界や農水省などの行政において重要な村落類型のタームとされるにせよ、お粗末であるといわざるをえない。

つまるところ、村落類型としてみた場合、「半農半漁」という括り方は、統計上の生産高では割りきれない生活の実態に対して、明確に概念規定することができず、まただからといって無視することもできないがための窮余の策であるように感じられる。むしろ生業の実態としては、農と漁の比率は半々という状況にはなくグラデーションをなして広い幅を示している。また、農と漁の複合の様相も、たとえば性差や年齢差による役割分担とか、集落内における家ごとの役割分担などさまざまなものがあり、単純なグラデーションではない。それをあたかも割り切れたかのように「半農半漁」という概念をつくり、そこに押し込めてしまったといえる。そのため、本来は多様な相を見せる生活の実態が覆い隠されてしまったのである。

2. 「農漁民」の発見

歴史学や社会学、地理学において、研究上の概念として漁村や漁民を設定しつつも、その生活は漁業だけで成り立つものではないという指摘はかねてからある。主として村の書き上げや経済統計等の資料を用いて、それは示された。

しかし、その実態は「半農半漁」といった括り方に示されるように、研究の多くは単なる生業技術の組み合わせの指摘にとどまるものであった。生業戦略という視点から、その実態として、人が農や漁またそれ以外の生業をいかに組み合わせているか、その様相にまで踏み込んで議論するものはほとんどなかった。言い換えるなら、従来の研究は村や家を単位にして、そこで営まれる生業のレパートリーを挙げただけのものであった。

そうしたなか、アチック・ミュージアム（日本常民文化研究所）の流れをくむ河岡武春と辻井善弥はそれぞれ違ったアプローチから「農漁民」の概念を提出して注目される（河岡、1976・辻井、1977・1980）。

研究概念としては、一見すると稚拙にさえ思われる用語であるが、その持つ研究史上の意義は大きい。当然、経済性にのみ注目して研究者が創り出した「半農半漁」といった便宜的な概念とは根本的に発想や考え方を異にする。つまり、「農漁民」は経済性だけでなく、生活全体をトータルに捉えようとするものであり、かつフィールド・ワークにより実態に迫ることで到達した概念であることが重要なのである。

河岡はおもに日本海岸にある潟湖周辺の低湿地に生きる人びとの生活から「農漁民」を発想している。体系化されずに終わったが、河岡の低湿地文化論の根幹をなす概念であるといつてよい。「漁民の水鳥猟」（河岡、1977）という論文にそれは象徴される。当時の民俗学における技術中心の生業論においては、漁民は魚を捕るものであり、水鳥を捕るのは猟師であるというのが常識とされる中であって、ほとんど無視されてきた生業複合的な視点を提示している。

それに対して、辻井はおもに三浦半島の磯根地帯に生きる人々に焦点を当て、台地の畑作と谷戸の稲作そして海辺での磯漁という複合的な生業のあり方を象徴させて「農漁民」を発想している。従来、磯漁はアマ（潜水漁）によるアワビ採取といった一部の漁業活動にしか注目されてこなかったが、その実態は日常的な自給的漁撈活動にあることを明らかにし、そこに光を当てたことは研究史上大きな意味を持つ。

この二人が、潟湖周辺と磯根地帯という日本列島内のまったく違った海浜環境に暮らす人びとの生活から「農

漁民」という概念に到達したことは、海付きの村における基本的な生計維持方法として「農漁民」という概念が普遍化の可能なものであることを示唆している。

磯根や潟といった水界に隣接して暮らす人びとの生業をつぶさにフィールド・ワークし、「農漁民」と概念化することによって、その基本的な生計維持のあり方が複合生業にあることを明らかにしたことは重要であろう。その後も、少数ながら何人かの研究者により、海付きの村の複合生業について事例研究が積み重ねられてきている。こうした「農漁民」が作る村は当然「漁村」や「半農半漁村」であるわけがない。

「農漁民」の概念を洗練させることで、海付きの村の生業研究は「海村」論や「半農半漁」論を超え、新しい段階を迎えるようになるかもしれない。その可能性を私は模索してゆきたいと考えている。

引用参考文献

- ・青野寿郎 1953 『漁村水産地理学研究 1・2』古今書院
- ・河岡武春 1976 「低湿地文化と民具 (1)(2)」『民具マンスリー』9巻3・4号
- ・河岡武春 1977 「漁民の水鳥猟」『民具マンスリー』10巻4号
- ・川名登、堀江俊次、田辺悟 1975 「三浦半島における近世漁村の構造」村上直編『近世神奈川の研究』名著出版
- ・辻井善弥 1977 『磯漁の話』北斗書房
- ・辻井善弥 1980 『ある農漁民の歴史と生活』三一書房
- ・農林統計協会編 2005 『農林水産統計用語事典 2005 改訂』
- ・羽原又吉 1954 『日本漁業経済史 上・中一・中二・下』岩波書店
- ・山岡栄市 1965 『漁村社会学の研究』大明堂



長崎県対馬市豊玉町廻地区の航空写真
港、集落、その背景に伸びる畑、西側の2本の谷筋に広がる田、周囲の山林、これらが1つのセットとなって廻地区は成り立っている。
(写真：対馬市豊玉支所提供 キャプション：橘川)

建築図面から見たわが国 近代和風住宅の設計手法について

内田 青蔵 (非文字資料研究センター 研究員)

はじめに…都道府県における近代和風建築 調査の実施

私の専門分野は、日本近代建築史である。この分野で、近年、とりわけ注目されている研究テーマのひとつが「近代和風建築」に関する研究である。一般に幕末から昭和戦前期の建築は、「近代建築」と称されている。そして、この「近代建築」のうち、とりわけ伝統的な要素の強いものは「近代和風建築」と称され、伝統的な意匠による建築であっても江戸期までの伝統建築とは異なるものとして区別されているのである。その理由は、「近代和風建築」が伝統的な建築様式に基づくものの、意匠や技法・建築材料がそれまで見られなかった西洋建築の影響を受けていること、加えて、造られた時代背景が異なることなどから、過去の伝統的な建築とは異なるものと考えられているのである。木造系の技法に関しては、江戸末期から昭和初期に最高点に達したといわれているし、また、造られた時代背景の違いとは、欧米の建築としての洋風建築が導入されるなかで和風と洋風という概念が相対化されてくるが、近代における和風建築は無意識でもそうした概念の存在の中で造られてきたという違いを意味しているのである。

さて、こうした伝統的な建築に関する研究が近年注目され始めたのは、文化庁が平成4年度から全国の都道府県毎に近代和風建築総合調査を開始し、現在も多くの府県で調査が展開されていることの影響が極めて大きい。そして、もうひとつは、これまでのわが国の近代建築史研究の研究姿勢への反省でもある。すなわち、これまでの日本近代建築史研究は、わが国への欧米建築の導入と定着の過程の解明に主眼が置かれてきた。しかしながら、現実の社会では、戦前期は圧倒的に伝統的な建築が多く建てられてきた。そして、そうした伝統建築そのものも次第に欧米建築の影響を受けて変化してきたのである。しかしながら、こうした伝統建築はいずれ消え行くものとして、研究対象として注目されることはほとんどな

かったのである。しかしながら、戦前期の洋風建築の取り壊しが進む中で、伝統的な建築もまた同様にやがて消えてゆくことを憂慮した研究者たちが、伝統的な建築の歩みを含めた新しい歴史研究を展開し始めたのである。それは、言い換えれば、これまでの日本近代建築史研究が高等教育を受けた建築家の活動だけに焦点をあてて語られてきたことへの反省といえる。いわば、無名の大工や職人をも含む市井の建築家たちの活動をも拾い上げようということである。今回の文化庁の調査は、こうした流れを反映したものともいえるのである。

近代和風住宅について

ところで、近代和風建築と称しても、その建築の用途は千差万別だ。社寺建築はもちろんのこと、明治初期には土蔵系の銀行建築もあったし、現在でも旅館はもちろんのことホテルでも和風系のものや、駅舎にも和風のデザインのものが存在する。そうした中で、近代和風建築の大半を占めるのは、やはり、独立住宅や別荘・別邸といった住宅系の建築である。

西和彦は近代の住宅建築を近代和風という観点から捉えたとき、これまで着目されてきた点として、①富裕層によって建てられた大規模住宅（皇族関連の住宅を含む）、②施主もしくは設計者の趣味が色濃く反映された特徴的なもの、のいずれかのものでしかなかったと述べている（『近代和風建築』日本の美術 11 NO. 450 至文堂 2003年）。これからわかることは、近代和風住宅として、基本的には規模が大きく且つ質も高い住宅建築、また、著名な建築家や著名人の手掛けた個性的な住宅建築だけがとりわけ注目されてきたということであり、名品主義的な観点から研究が進められてきたことを窺わせる。こうした名品主義的な観点のよさは、誰にも極めて分かり易く、視覚的にも簡単にその建築の価値が見出せることである。すなわち、建物の規模が巨大なことは誰でもが瞬時に感じる事ができるし、質の良し悪しは別にして装飾に満ちた建築は迫力を感じさせる。いずれ

にせよ、これまでの近代和風住宅は、理論的解釈というよりもこうした視覚的で分かり易い部分を中心に評価されてきたことが窺えるのである。

そこで、私はこれまでの近代和風住宅の研究成果を整理していくなかで、規模や視覚的な意匠に重点を置いた分析方法とは異なる新たな近代和風住宅の特徴を捉える視点がないかと模索してきた。このような模索の中で、住宅総合研究財団からの調査研究依頼を受け、清水組（現清水建設株式会社）の手掛けた住宅建築の『彩色図集』に出会い、新しい視点のヒントを得ることができた。その成果の一部は2009年に『明治・大正の邸宅—清水組作成彩色図の世界』（内田青蔵監修 住宅総合研究財団編 柏書房）にまとめている。その新しい視点とは、図面を史料としてはじめて解明できることであり、それを私は設計手法の解明と呼んでいる。

設計手法への着目

とりあえず、ここでは興味深い住宅事例をひとつ紹介してみたい。この住宅は、『彩色図集』に収録された住宅のひとつで、「麻布古河邸」と記されているように、施主は戦前期の財閥のひとつである古河財閥の3代目当主の古河虎之助（1887 - 1940）で、古河市兵衛（1831 - 1903）の長男として、明治20（1887）年に生まれている。明治36（1903）年に慶応義塾中等科を中途退学し、明治38（1905）年にはアメリカのコロンビア大学に入学し、採鉱冶金・地質鉱山行政学を学んでいる。古河市兵衛は、2代目として陸奥宗光（1844 - 97）の二男潤吉を養子に迎えて跡継ぎとしたものの、潤吉が明治38（1905）年12月に急死したため、留学中の虎之助が帰国し、後を継いだのである。3代目となった虎之助は、明治44（1911）年に古河鉱業会社を合名会社に改組し、第一次世界大戦の好景気に乗じて会社を発展させた。その功績もあって虎之助は大正4（1915）年に男爵となっている¹⁾。

ところで、古河邸といえば、J. コンドルの設計で知られる大正6（1917）年竣工の旧古河虎之助邸が知られるが、ここで扱う住宅は、竣工は大正10（1921）年の建物で、清水組の設計施工による和風の住まいである。

図1は平面図であり、図2は立面図である。基本的には内外ともに和風色の色濃い大邸宅で、木造の平屋建て一部2階建ての建物であり、母屋と共に2階建ての土蔵が併設されている。平面図によれば、中央に中庭を配し、それを取り囲むように諸室が配されていることがわかる。

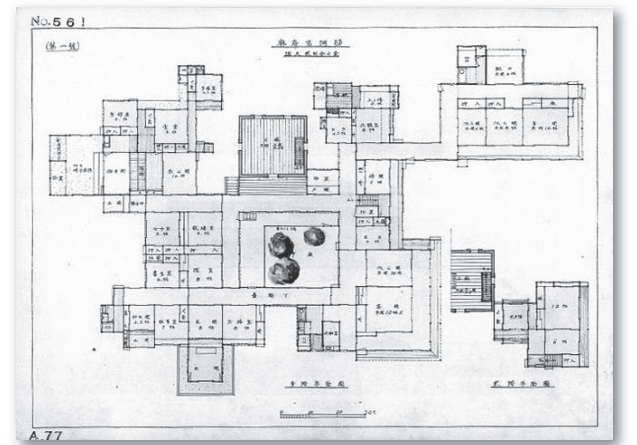


図1 「彩色図集」掲載の「麻布古河邸」平面図
(清水建設株式会社所蔵資料)



図2 「彩色図集」掲載の「麻布古河邸」立面図
(清水建設株式会社所蔵資料)

さて、注目していただきたいのはこの図1の平面図である。小さくて見逃しそうだが、よくみると「客間」「次の間」と「居間」「次の間」の部分及び土蔵部分には、室名と広さが記され、かつ広さの前に「京間」という記述が読み取れるのである。他の部分には室名と広さがあるだけで、「京間」の記述は見られない。この記述の有無は、いったい何を示しているのだろうか。そのまま素直に解釈すれば、これらの記述のある諸室は「京間」で設計され、他は江戸間で設計されていると考えることができる。ただ、一般に同じ建物でありながらその一部分の設計寸法が異なるということは、寸法の取め方の処理が難しく、また、建設時に用いる建築部材の長さや太さが異なることになり、建設工事の作業は極めて煩雑で、面倒な処理を必要とすることが想像される。その意味では、同一建物で異なった設計寸法を併存させることは、設計はもちろんのこと、部材加工や工事過程を考えると何の利点もなく、むしろ煩わしさだけが強調された方法

といえるのである。そう思いつつも、図面上には「京間」の記述が存在するのは事実であり、そこには何らかの意図があったと考えざるを得ないのである。

そこで、改めて現清水建設株式会社の所蔵する図面資料の中から、この古河邸に関する図面を探し出し、設計寸法の確認を行うことにした。調査によれば、古河邸に関する図面は76枚が確認された。平面図、立面図はもちろん様々な詳細図も含まれている。ちなみに、平面図は年代が記されたものとしてもっとも古いのは大正7(1918)年10月3日のものが確認された。その平面図は、彩色図面と比べると部分的な納まりなど若干の違いがみられるものの、部屋の広さや配置などの基本的構成は変わらず、大正7年段階で設計はほぼ完成していたことがわかる。

ところで、多種多様な図面の中で、1枚極めて興味深い図面の存在が確認できた。図面の名称は「柱真々寸法書入平面図」とあり、各部屋の寸法が具体的に記された図面である(図3)²⁾。具体的には単線で住宅平面図が描かれ、各部屋には名称などの記述が加えられ、それに各部屋の真々の寸法が記されているのである。この部屋の記述をみると、「御化粧室」「御台子」「御仏間」といった家族生活の部分の部屋には「中間」という記述がみられる。ちなみに、この「中間」は「中京間」を指すものと考えられることから³⁾、この古河邸では、実は設計寸法は「京間」に新たに「中間」を加えた、「京間」「中間」および「田舎間」の3種類の寸法が同時に採用されていた可能性が推察できるのである。

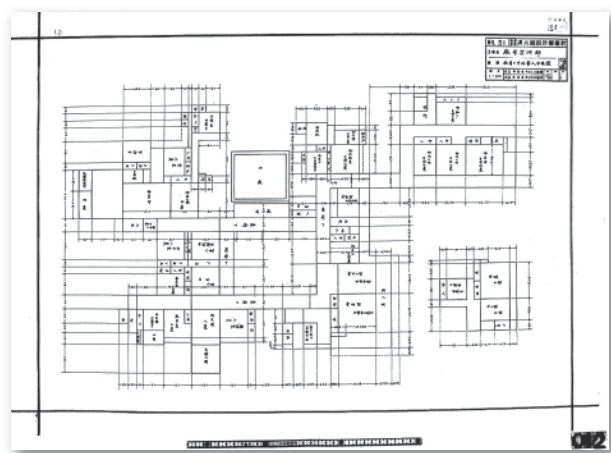


図3 「麻布古河邸 柱真々寸法書入平面図」
(清水建設株式会社所蔵資料)

では、具体的な寸法はどのようにになっているのだろうか。「京間」の使われている「御客間」「御次之間」を

見てみよう。「御客間」は12畳半の広さの部屋であり、2間半×2間半の正方形の畳部分に床と柵と付け書院が設けられている。この2間半が真々で「16.18尺」とあることから、柱の寸法が4寸3分(0.43尺)⁴⁾であるからこの柱一本分の太さの寸法を引くと、1間は内法で6.3尺となる。同様に「御居間」は10畳の2間半×2間で、2間半が真々で「16.13尺」とある。柱は3寸8分(0.38尺)⁵⁾であるから、1間は同じく内法6.3尺となる。

次に「中間」として「御化粧室」をみると、広さは8畳の2間×2間で、真々で「12.32尺」と記されている。この部屋の柱は3寸6分(0.36尺)⁶⁾であるから、1間は内法で5.98尺となる。また、2階の10畳間も「中間」と記されている。2間半が15.34尺で、柱は3寸4分(0.34尺)⁷⁾であるから、1間は内法6尺となる。「御仏間」は6畳の2間×1間半で、2間が12.36尺と記されている。柱は3寸6分⁸⁾であり、1間は内法6尺となる。

「京間」「中間」の記述のない部屋を見てみると、例えば「玄関」は8畳まで2間×2間で、寸法は12尺であるから、真々で1間が6尺となるし、柱は4寸5分(0.45尺)⁹⁾であるから、内法で1間は5.775尺となる。「書生室」は6畳間の2間×1間半で、2間が同じく12尺とあり、真々で1間6尺である。なお、柱は4寸角(0.4尺)¹⁰⁾であり、内法で1間は5尺8寸となる。

以上をまとめると、基本的には、「京間」は内法6尺3寸、「中間」は内法6尺、記述のない部分は真々で6尺を基準として設計されていたと考えられる。ちなみに、『建築用語辞典』¹¹⁾によれば、京間は真々で1間6尺5寸、内法は6尺3寸、中京間は真々で1間6尺2寸、畳割(内法)では6尺、田舎間は真々で1間6尺とあり、現在知られる「京間」「中京間」「田舎間」の3種類の設計寸法を併用して設計されていたことがわかるのである。

複数の基準設計寸法を併用することの意味

改めて、整理すれば古河邸では、ひとつの住宅でありながら、基準となる設計寸法は3種類が用いられていた。それらの寸法の用いられていた部屋を用途別に見ていくと、「京間」は「御客間」や「御居間」といった接客に用いる中心部分並びに主人の居間部分、「中間」は「御化粧室」「御仏間」「御台子」などの家族や婦人の使う場所、「田舎間」は「御玄関」「応接室」「内玄関」とともに「執事室」「書生部屋」「女中室」といった接客に用いる場と使用人の場である。「田舎間」の「応接室」は玄関脇の8畳で、確かに接客用だが簡単な短時間の

事務的な接客用の場と思われ、本格的な格式の高い接客の場は「御客間」である。このことから、その基準設計寸法は、この住宅を使う人やその用途に合わせて使い分けられていたことは明らかといえるのである。言い換えれば、接客の場と主人の部屋は、設計寸法上も他の部屋より大きな「京間」で設計され、部屋の格式性を備えていたのである。同様に、家族の生活の場は、使用人の部屋よりも大きな「中間」を用い、明確に区別をしていたのである。それは、まさに身分制を建築化した表現方法ともいえるかもしれない。

ところで、こうしたひとつの住宅でありながら、基準となる設計寸法を2種あるいは3種併存させる設計手法は、いつ頃からみられるのか。これは、今後の課題だが、江戸期の武家屋敷の研究をされている後藤久太郎博士によれば、江戸期の各藩邸のほとんどは1間6尺5寸の京間で設計されており、他の寸法を用いるのは例外的な存在であると述べている¹²⁾。このことを踏まえつつ、私は、この古河邸にみられるような同一建物において設計寸法を2種あるいは3種併存させる設計の方法は、わが国の近代に初めて生み出された独特の手法だったのではないかと考えている。なぜならば、近代の上流層の住宅形式として和館と洋館を並置した和洋館並列型住宅というものがある(図4)。この和洋館並列型住宅のように和館と洋館という相異なるものを並置してひとつの住まいとする考え方やこの系譜の中で誕生したと考えられる玄関脇に洋風応接室を備えた住宅(図5)の考え方には、異なる寸法体系の建物を並列してひとつとすることにも相通じる考えが見取れるからである。私の現在の興味のひとつは、この設計方法の解明とこの設計手法がこれまで明らかにされて来なかった近代特有の設計システムであったことの証明にある。研究は、まだ始めたばかりである。いろいろご教授いただければ幸いである。



図4 和洋館並列型住宅の平面図

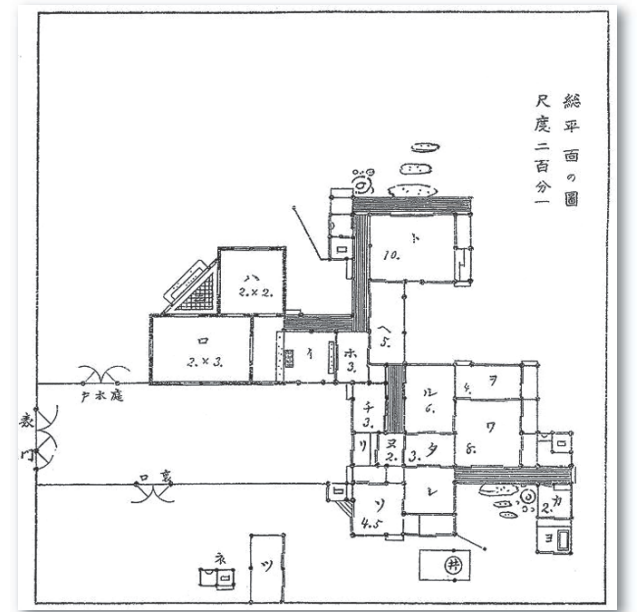


図5 玄関脇に洋風応接室を備えた住宅例。口は「応接室」、ハは「書斎」とともに洋室として計画されていた。

- 1) 拙稿「彩色図面解説」『明治・大正の邸宅-清水組作成彩色図の世界』柏書房 2009年参照。なお、この拙稿の続報が「わが国戦前期の近代住宅にみられる設計手法について」『神奈川大学工学研究所所報』(第32号 2009年)所収の論文である。参考にしていただければ幸いである。
- 2) こうした全体の寸法を記述することを目的とした図面の存在は極めて珍しい。おそらく、複雑な処理をしなければならぬために描かれた図面と思われる。その意味では、この図面の存在が設計寸法を3種用いたことを示すものともいえるであろう。
- 3) 例えば、大正4年の『理想の住宅』(婦人文庫刊行会)では、著者の保岡勝也が「田舎間は六尺を一間としてあるが、中間は六尺二寸乃至三寸、京間は六尺五寸となっている」と述べている。この寸法は真々生の寸法と思われるが、「中間」が「田舎間」と「京間」の中間的な寸法で、基本的には「中京間」を指していると考えられる。
- 4) 「御客間断面及入母屋之図」(大正7年11月10日)による。
- 5) 「御居間断面図」(大正8年3月15日)による。
- 6) 「御化粧室便所断面及入母屋図」(大正7年12月17日)による。
- 7) 「御仏間及式階断面之図」(大正7年11月21日)による。
- 8) 注7参照。
- 9) 「表玄関廻り断面各入母屋之図」(大正7年11月7日)による。
- 10) 「書生室控室廊下断面図」(大正7年11月8日)による。
- 11) 建築用語辞典編集委員会 技報堂 1995年。
- 12) 「近世指図の作図技法と図面表現-諸藩江戸藩邸指図を中心に」『生活科学研究所研究報告』第23巻、宮城学院女子大学生生活科学研究所、1991年。



コラム 招聘レポート Column

2009年度は当センターの海外提携機関より、4名の招聘研究者をお迎えしました。

名前	所属	招聘期間
張新朋	浙江工商大学日本文化研究所 教員	1月11日～1月30日
潘倩菲	華東師範大学文芸民俗学専攻 博士課程	1月21日～2月10日
白松強	中山大学中国語文学系民俗学専攻 博士課程	2月7日～2月27日
Park Jeongeun	ブリティッシュコロンビア大学アジア研究専攻 博士課程	2月14日～2月28日

日本に現存する中国宋元代以降禅僧の頂相に関する調査報告



張新朋 (浙江工商大学)

頂相は元來、頂髻の相といい、その後転じて禅宗祖師及び先徳の肖像画を指すようになった。如來の無間頂相になぞらえてそう呼ばれたものである。頂相は中国にはじまり、比較的早い時期に隣国日本へと伝來した。例えば、真言五祖である善無畏・金剛智・不空金剛・一行・恵果の頂相は、唐代に帰国した日本僧空海により日本へ持ち帰られている。その後、付法信物の一つとして、頂相は入唐求法日本僧により珍蔵の法宝と看做されるようになり、そのため日本には日本僧達を持ち帰った中国高僧の頂相画が比較的多く蔵されているのである。同時に、日本の禅林は初期の模倣の段階を経て、中国の頂相形式を消化吸収し、その基礎の上に日本独自の頂相形式や風格を確立していった。また日本の禅林には日本の高僧大徳の頂相も多く伝存している。これら高僧大徳の頂相画の調査研究には以下のような意義がある。

- (1) 頂相画の調査研究を通じ、関連する中日両国の仏教宗派間における授受流行を知ることができ、さらに中日仏教交流の状況を明確に把握し、宗教交流の側面から当時の中日文化交流について論じることができる。
- (2) これらの頂相画の調査研究を通じて、頂相創作時の人々の思想や美意識を探ることができ、当時の文化的背景をより深く理解することができる。

- (3) 頂相は通常像主の自賛や別人の賛語を伴っており、これらの賛語は中国編纂の高僧大徳の文集中にはあまり収録されていない。これら賛語を収集し研究することを通じて、著賛者の文集に収められなかった不備を補うことができる。それと同時に、著賛者の求法活動における理念や心境を探ることもできる。

今回の考察は、日本所蔵宋元代以降の高僧の頂相を主要調査対象とするものであり、筆者は主に神奈川大学図書館、神奈川大学日本常民文化研究所、神奈川県立歴史博物館、金沢文庫、東京国立博物館、駒澤大学禅文化歴史博物館、駒澤大学図書館などの所蔵機関において資料調査を実施した。また福田先生の引率の下、鎌倉円覚寺、建長寺、浄智寺などの寺院において実地調査を実施した。上述の調査研究により、筆者は中国宋元期以降の禅僧の頂相画44幅を収集した。そのうち像主に言及しているものは24幅に及び、宋代の禅僧が10名(北宋3名、南宋7名)、元代が5名⁽¹⁾、明代が8名、清代が1名である。

頂相は付法信物の一つとして、先代の禅師が弟子に伝授するものであり、法脈継承の証になるものであった。例えば、『仏祖歴史通載』巻二十には「大恵説偈以頂相付師、日有徳必有光、其光無間隔。各實要相称、非青黄赤白」とあり⁽²⁾、『釈氏稽古略続集』巻二には「後帰止

巖処決沢、為堂中第一座。後巖以法衣弘子、頂相並偈付之」とある⁽³⁾。また『続伝灯録』巻六にも「(円)鑑時出洞下宗旨示之、悉皆妙契。付以大陽頂相、皮履、直裰、囑曰代我統其宗風、無久滞此、善宜護持。遂書偈送曰……」などの記録が残されている⁽⁴⁾。つまり本稿で扱う史料は上記の文献記載に見える「頂相」の実物ということになる⁽⁵⁾。禅師が弟子に託したこれら頂相には、通常禅師の偈語或いは賛文が載せられている。例えば、円爾弁円が持ち帰った無準師範の頂相には無準師範自身の自賛があり、俊苻が持ち帰った道宣像と元照像には楼鑰が書いた賛文が付されている。また元々、偈語或いは賛文が付されていなかった頂相でも、師弟間の授受による流伝の過程で、嗣法者が高僧や学者に賛を請う場合が少なくなかった。例えば、明菴栄西の頂相には「建仁開山千光禅師頂相、謹書仏光国師所讚之語、以塞仲首座之請」と見え、春屋妙葩の頂相には「智覚普明国師春屋和尚遺像、其徒弟昌緒請賛」と記されており、無涯仁浩の頂相の賛語にも「右無涯浩禅師肖像、住讚州龍光寺徒弟通真請賛」等とあることから禅林の間では「請賛」がしばしば行われていたことが窺える。このように頂相は、禅僧の自画像と偈賛が並存し、図像と文字が表裏をなすという構成になっている。そこから、その禅僧の修行や求道において達した精神的境地、悟りの程度及び後世の評価など像主に関する重要な情報を得ることができる。本稿では主に各頂相に記されている偈賛内容の検討を通じ、その頂相の解説や解釈をめぐる問題、そして創作背景などについて若干の考察を試みたい。

付記：今回の日本訪問は、筆者にとって貴重な体験であり、滞在期間は短かったが、非常に実り多いものであった。今回の訪問に当たっては浙江工商大学の王勇氏、王宝平氏、肖平氏、江静氏、楊寒英氏、水口乾記氏、福田忠之氏、そして日本側の先生である福田氏、原田氏、彦坂氏、和田氏、内藤久義氏、留学生である李利氏、那仁畢力格氏等、多くの方々から多大な支援をいただいた。上記の先生方のご支援とご助力がなければ、今回の訪問調査を円満に終えることが難しかったことは言うまでもない。以上の先生方に改めて深く感謝申し上げる次第である。ただ今回は滞在時間が短く、また自身の語学力の不足により、訪問調査の結果自体は決して満足のいくものではなく、大方の期待に添えなかった点も少なくない。今後は主に日本語の習得に努め、次回再び日本を訪問する際には、より充実した結果を出すことがで

きるように努力していく所存である。

訳者：福田忠之 (浙江工商大学)

- (1) 高峰原妙、断崖了義、中峰明本の三名はみな宋末元初の王朝交代期に活躍した禅僧であるが、ここでは学界での一般的な見解に従い、元代に分類する。
- (2) 『大正新修大蔵経』(大正一切経刊行会、新文豊出版有限公司、1983年)第49巻、694頁。
- (3) 『大正新修大蔵経』第49巻、935頁。
- (4) 『大正新修大蔵経』第51巻、499頁。
- (5) 中国では、元來、帝王の将相或いは有名学者や高僧大徳の肖像画を「真」、「真容」、「真影」と称することのほうが多かった。「頂相」が、高僧大徳の肖像を指す用語として、一般的に用いられるようになったのは、かなり時代が下ってからのものであると思われる。



研究発表 (1月28日)



円覚寺にて



都市生活中的日本传统戏剧

潘倩菲 (华东师范大学)



一、研究目的及概述

日本对传统文化的保护一向非常重视，特别是细节之处更见用心。而本人目前所做的上海的传统戏曲研究，尤其关注城市的进步和传统艺术的衰退之间的矛盾。因此在横滨和东京两地调研，近距离观察日本传统戏剧在都市空间中的存在状况，对本人的研究来说是很重要的学习过程。

考察地点分为三类：1) 拥有大量珍贵资料的大学研究型机构。2) 以博物馆为主的展示型场馆。3) 生活型演出场所，包括能乐堂、剧场、歌舞伎座等。剧场直接和民众的日常生活发生关系，是戏剧生活态的保存空间。因此研究的重点是第三类演出场所。这些都市生活中传统戏剧的生存空间和它们所代表的传统文化的保护方式为我们今日之研究提供了宝贵的经验和启示。

二、都市生活中的日本传统戏剧

考察地之一：“学习中的传承”之横滨能乐堂

横滨能乐堂定期举办仕舞、太鼓等培训班及结业发表会。主要目的是通过基本的学习让学员对能乐有最初步的了解和直接的感受。在此基础上有兴趣者可进一步学习。

考察地之二：“身兼数职”的国立剧场

国立剧场兼有表演、展示、推广和研究的多重功能，以多重身份承担了宣传日本传统戏剧文化的重任。它既有大小剧场推出重要演出；也通过传统艺能情报馆，为民众提供了解传统艺能和舞台艺术的机会。

考察地之三：“艺术美的体验”之银座歌舞伎座

歌舞伎座的“一幕见席”，能帮助观众尤其是年轻观众和游客在短时间内感受日本极具特色的歌舞伎表演。歌舞伎的特点之一就在于讲究舞台背景，给人以华丽的视觉享受。因此“一幕见席”避开了冗长的表演，让不熟悉这一表演的观众也深深体验到美的艺术感受。

考察地之四：“适者生存”的大众演剧

在三吉演艺场和浅草木马馆演出的大众演剧注重诙谐

的幽默感，也试图通过情义的主题来感动观众，剧场氛围轻松随意，表现出更加“亲民”的特点。因为没有国家和团体的扶持，剧团始终要为生存和竞争而努力。

三、结论

通过调研我们看到日本传统戏剧在都市民众的生活中以不同形式存在着。这些不同类型的场所，承载着不同的文化意义和功能，并满足了不同的需求。总的来说，文化传承、学习体验、艺术审美、感情寄托和压力释放的功能使得传统戏剧在都市生活中具有充分的存在的理由和价值。日本的传统戏剧包括中国戏曲在都市中都面临着如何保护和如何在日常生活中得到延续发展的问题，尤其是如何针对不同的需求构建适合它们的生存空间，更是一项持久的课题。



横滨能乐堂之本舞台



研究发表 (2月9日)

無形文化遺産分類にみられる差異 —中国と日本の比較を中心に—

白松強 (中山大学)



はじめに

無形文化遺産とは、民俗文化財、フォークロア、口承伝などの無形文化遺産を指す。2003年の第32回ユネスコ総会で採択された『無形文化遺産保護条約』の第2条では、「無形文化遺産とは、慣習、描写、表現、知識及び技術並びにそれらに関連する器具、物品、加工品及び文化的空間であって、社会、集団及び場合によっては個人が自己の文化遺産の一部として認めるものをいう」と定義している。特に中国と日本は「一衣帯水」の隣国で、ともに東アジアに属しており、両国の伝統文化に共通のものが多くということは、理解に難くない。しかし、それぞれの社会環境や歴史的境遇が異なることから、両国の文化を反映した差異もみられる。とりわけ、無形文化遺産の分類に関しては差異も多い。そこで、中日における無形文化遺産の分類について述べてみたい。

I 中国の無形文化遺産についての分類

(1) 無形文化遺産についての定義

中国では、文化遺産と自然遺産は有形的、物質的であるとされるのに対して、無形文化遺産は非物質文化遺産と称されている。世界遺産は建造物など形があり、動かないものであるのに対し、無形文化遺産は形にならない人間が持つ知恵や習慣などを指す。中国は国際条約の概念に照らして、次のように定義づけをした。無形文化遺産は、人びとの慣習・描写・表現・知識及び技術並びにそれらに関連する器具、物品、加工品及び文化的空間のことを言う。つまり、無形文化遺産とは、各民族が代々伝承し、一般庶民の生活と密接にかかわっている各種伝統文化の表現形式、「例えば民俗活動、演技芸術、伝統知識と技能、及びそれと関連する器具、実物、手作業製品等」と文化空間のことで、それには口承伝承・文化キャリアとしての言語、伝統演技芸術、民俗活動・儀礼・節句、自然界と宇宙に関する民間伝統知識と実践、伝統工芸技能及びこれらの表現形式とかわる文化空間が含まれている。

(2) 無形文化遺産についての分類

無形文化遺産については2008年現在「非物質文化遺産保護法」が立法過程にあるが、中国の無形文化遺産といっても幅広いため、これに先立って2006年6月に国務院が、ユネスコ総会で採択された「無形文化遺産保護条約」という法律や中国の実情に基づいて、第一回の「国家級非物質文化遺産」のリストとして518項目を公表している。リストでは、無形文化遺産を民間伝承、民間音楽、民間舞踊、伝統芝居、寄席演芸、曲芸・競技、民間美術、伝統手工芸、伝統医薬、民俗等の十種類のものに分けている。また、中には春節などの年中行事、梁祝などの伝承や説話、京劇や昆曲などの伝統芸能・伝統音楽のほか、太極拳や鍼灸も含まれている。

II 日本の無形文化遺産についての分類

(1) 無形文化遺産についての定義

日本の「文化財保護法」は1950(昭和25)年8月29日に施行された。この法律の第四章では、無形文化遺産保護に関する制度も完備された。無形文化遺産保護に関する制度の本源に溯ると、前身である1919(大正8)年に公布された「史蹟名勝天然記念物保存法」、1929(昭和4)年に公布された「国宝保存法」制定、及び1933(昭和8)年に公布された「重要美術品等の保存に関する法律」の中では、無形文化遺産保護に関する制度がすでに含まれている。日本の文化財保護法第2条第1項第2号では、演劇、音楽、工芸技術その他の無形の文化的遺産で、日本国にとって歴史上又は芸術上価値の高いものを、「無形文化財」と定義している。地方公共団体の文化財保護条例等においても同様に、文化財の種類の一つとして「無形文化財」を規定している場合がある。文化財保護法によると、日本では、文化財を有形文化財・無形文化財・民俗文化財(有形民俗文化財と無形民俗文化財)・記念物・伝統的建造物群の五つに分類している。日本の分類から見れば、中国の無形文化遺産は日本の「無形文化財」と「無形民俗文化財」を統合したものと考えられる。

(2) 無形文化遺産についての分類

日本では、まず無形文化遺産を無形文化財と無形民俗文化財の二つの種類に分け、その上で、無形文化財を芸能や工芸技術に分けている。そのうち、芸能は雅楽、文楽、歌舞伎、組踊、音楽、舞踊、演芸などの種類を含めており、工芸技術は陶芸、染織、漆芸、金工、木竹工、人形、手漉和紙などを含めている。無形民俗文化財は、主に衣食住・生業・信仰・年中行事などに関する風俗慣習、民俗芸能、民俗技術を含めている。

おわりに

中国と日本を比較すると、それぞれの無形文化遺産に含まれる内容が異なるということは、疑問の余地がない。両国の実情が異なるため、当然といえよう。日本の無形文化遺産の種類は中国ほど多くないが、日本の分類は中国よりも詳しいと思われる。日本は1950年に「文化財保護法」を制定し、他国に先駆けて無形文化遺産保護に取り組んできている。日本はその豊富な知見を活かし、

中国を援助するとともに、文化面においてはユネスコと連携し、世界の有形・無形の文化遺産の保存修復、振興及び人材育成の分野での支援を日本の協力の柱としている。日本の恩恵に浴して、現在、中国は日本から、日本の無形文化遺産保護の先進的な理念、理論、基準、方法及び技術などを大いに学ぶ価値がある。



2001年ユネスコの無形遺産傑作リストに登録された日本能楽



2001年ユネスコの無形遺産傑作リストに登録された中国崑曲

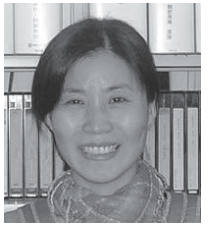


研究発表 (2月24日)



白さん・Parkさん送別会

My First Research Trip to Japan



Jeongeun Park (The University of British Columbia)

Considering that I hadn't traveled to Japan while I lived in South Korea, maybe I didn't realize how important Japanese religions were in terms of understanding East Asian religious traditions at that time. Anyway, I had the great opportunity to visit Japan and to do research on Japanese religious traditions from February 14 to 28, 2010. After packing my simple suitcases, I flew to Japan from Vancouver where the 2010 winter Olympics took place at the same period.

This research trip was invited and funded by the Research Center for Nonwritten Cultural Materials, Kanagawa University. Thanks to this invitation, I was staying in Yokohama while doing research in Tokyo as well. My main interest was focusing on the two areas: exploring Japanese religions and collecting my research materials. First of all, thanks for kind advice from Professor Sano and Professor Fukuta, I visited several places where symbolically could represent Japanese religious tradition from the past to the present: the Isejima Shrine (伊勢山皇大神宮), Fujisawa City Crematorium (藤沢聖苑), Sensoji (金龍山浅草寺), Asakusa Shrine (浅草神社), Meiji Shrine, Sojiji (総持寺) and Kawasaki daishi (川崎大師). After visiting these places, I realized that Japanese religions have been related closely to the common people's life. For instance, when visiting Asakusa Shrine and Meiji Shrine, I encountered with the traditional wedding ceremonies in which the brides and the grooms were wearing so gorgeous traditional costume. In addition, I saw the graveyard in the Buddhist temples such as Sojiji. These show that Shinto and Buddhism are bound in the life of the common people as religions for life and death

respectively. It seems one of the most unique Japanese religious traditions.

Secondly, for collecting my research materials I visited several libraries: Research Centre for Nonwritten Cultural Material at Kanagawa University, the Komazawa University library, Institute for Advanced Studies on Asia at the University of Tokyo, and the National Diet Library. I collected various materials which were valuable as well as rare, such as 朝鮮佛教の史的考察 published in 1911, and 統計摘要 of 1939 published by 朝鮮総督府.

Based on these materials, I revised my research paper and presented it in the Korean Studies Graduate Students Seminar which was sponsored by Centre for Korean Research at the University of British Columbia, March 19 2010. In its title "Modernity and Korean Buddhist Journals: the Emergence of Modern Buddhism in Korea in the Late Nineteenth Century and the Early Twentieth Century" I examined how Korean Buddhism defined itself when encountering Japanese Buddhism during the late nineteenth and early twentieth centuries and whether there was any Japanese Buddhist involvement in Korean Buddhist journals, and what role the Korean Buddhist journals played during that time.

In this paper, I explored the modernization of Korean Buddhism, which was achieved as a result of power relations among Buddhist elite men as well as complex of socio-political contexts of imperialism, modernity and colonialism. From an interactive perspective, this research provided new interpretations of the construction of

knowledge and power, and the representation of the modern identity of Korean Buddhism. During the colonial period, most Buddhist intellectuals were involved with the Buddhist journals as editors or contributors. Therefore, it was significant to examine the new production of knowledge and the emergence of Buddhist elites through the Buddhist journals. In addition, it focused on Japanese Buddhist publication of the vernacular journal, Tongyang kyobo, which was published by Jōdoshū 浄土宗, the Japanese Buddhist missionaries' strategies of proselytization in Korea, and the relation between knowledge which was constructed and spread by the vernacular Buddhist journals and modernity of Korean Buddhism. After encountering Japanese Buddhism, Korean Buddhism entered the modern era and attempted to find its new modern identity. Modern Korean Buddhism had a complicated relationship with Japanese Buddhist missionaries. I concluded that the first Buddhist journal Tongyang kyobo reflected the discourse of the Buddhist communities and also showed that Japanese Buddhist missionaries used language to promulgate their beliefs.

I'd like to express my gratitude to Kanagawa University and the Research Center for Nonwritten Cultural Materials for inviting me. In addition, I wish to express my deepest gratitude to Professor Sano, Professor Fukuta, my tutor Mr. Cho, Ms

Hikosaka and the staffs in the office of the Research Center for Nonwritten Cultural Materials.



川崎大師 聖徳太子年祭



研究発表 (2月24日)

表紙写真資料解説

横長の『朝鮮神宮全景図』(辻子実コレクション)に年紀はないが、左下隅に書かれた「朝鮮神宮略記」の記事の末尾に「大正十四年十月御造営を竣へ同月十五日勅使御差遣の上極めて莊嚴に鎮座祭を執り行はせられたり」とあり、大正十五年の朝鮮神宮の様相が描かれているものと判断される。画面右下方の長大な石段は384段からなる大石段。左上方には、拝殿および瑞垣で囲まれた本殿からなる社殿群。当時の朝鮮神宮の様相が詳細に描かれている。

一方、現状写真(稲宮康人撮影)は当時の拝殿前あたり

から本殿方向を写したもの。池の手前から後方の山の頂(テレビ塔)に向かう軸線上に本殿があったと思われる。その軸線は現在も生きている。

この絵図や写真は、「海外神社(跡地)に関するデータベース」(<http://www.himoji.jp/himoji/database/db04/>)で公開している。同データベースは、3月に発足した海外神社研究会の協力によって拡充を図っており、内容的にもさらに充実させていくつもりである。

コラム 派遣レポート

Column

2009年度は1名の学生を海外提携機関に派遣しました。

名前	派遣先	派遣期間
藤川 美代子	中山大学 中国非物質文化遺産研究中心	2月27日～3月18日

中国広東省の水上居民を訪ねて

藤川 美代子(歴史民俗資料学専攻 博士課程3年)



漁業や水運業を営みながら船で暮らす人々は、多く Sea Nomads、漂海民、水上居民、水上生活者などと呼ばれる。中国において、こうした人々の居住地域は福建・広東・広西の海や河川に最も集中している。彼らは、歴史上「蜑民」・「疍民」・「登戸」などと称され、一般的に陸地に定住する人々からの差別と排除を経験してきた。また、その起源が少数民族とされるなど、中国社会における多数派の漢民族とは異質の存在として位置づけられることも多かった。しかし、1950年代に全国各地でおこなわれた民族識別工作で各地の蜑民は漢民族と認定され、その呼称も水上居民へと改められた。これまで、水上居民と呼ばれる人々に関する研究は、主に香港や広東省を中心とする広東研究の中でおこなわれてきた。2007年から、福建省南部を流れる九龍江で漁業や水上運搬業に従事しながら、長らく船上生活をつづけてきた「連家船漁民」と呼ばれる人々の生活を研究しはじめた私にとって、水上居民研究の本場ともいえる広東省へ赴き、彼らの暮らしぶりを肌で感じたいというのが、いつしか大きな望みとなっていた。

そんな中、2010年2月27日から3月18日までの日程で、派遣研究員として広東省中山大学の非物質文化遺産研究中心を訪れることができるという幸運に恵まれた。この滞在中、私は広東省に暮らす水上居民の歴史と現在の生活について把握することを研究課題とした。中山大学は、その前身であった嶺南大学時代から、珠江流域で生活する水上居民に関する研究に力を入れており、成果論文も多いため、滞在期間の大部分は大学での資料収集に充てられた。しかし後半の4日間は、劉曉春教授の

紹介で、中山大学のある広州市から300kmほど離れた汕尾市の漁村、Y新村を訪れることができた。

Y新村の眼前に広がる汕尾港は、中国の「全国六大特等漁港」にも数えられ、漁業や海運のさかんな港湾である。大小さまざまな漁船が並び、船に住む人こそみられないものの、出港前に船首で「船頭公」という神明に線香と紙銭を捧げ、豊漁と安全を願う夫婦の姿などをうかがうことができた。私はここで初めて、汕尾港に船を停泊させる人々が、「浅海漁民」・「紅衛漁民」・「瓠船漁民」と呼ばれる3つのタイプに分けられることを知った。

浅海漁民とは、以前から陸上に家を所有し、浅い海域で漁をおこなった人々を指している。彼らは、漁業のかたわら、農業をおこなうこともあったようである。紅衛漁民と瓠船漁民はいずれも、かつては陸上に土地や住居を所有せず、船で暮らしながら漁をおこなう水上居民であった。紅衛漁民とは、日中戦争前後に、珠江デルタ周辺や広西チワン族自治区から汕尾新港へ移動してきて、水深の深い海域で漁をした人々を指す。福建省南部と並ぶ閩南方言圏の汕尾にあって、紅衛漁民同士は現在でも日常的に、出身地域の方言である広東語を話すという。瓠船漁民とは、清の乾隆年間に汕尾の諸地域や隣の惠州から汕尾港へ移動し、中海と呼ばれる海域で漁をおこなった人々のことである。彼らは日常的に閩南方言を話し、中海と呼ばれる海域で漁をして汕尾へ帰港するという船上生活をつづけていた。この瓠船漁民の人々が1950年代になって手に入れた定住拠点が、現在のY新村である。

Y新村の人々は、日本から訪れた突然の来客をとて

も親切に迎えてくれ、彼らのあいだに伝わる「漁歌」の練習風景や、最近になって新しく建てたという村内の廟宇を快くみせてくれた。私が福建省の漳州市で連家船漁民の研究をしていることを告げると、漁民のおばあさんたちは「あら、私たちの祖先は皆漳州から来たのよ！だから、私たちも漳州と同じ閩南方言を話すの」と口をそろえ、私も甌船漁民と呼ばれる人々を、より身近に感じることができた。その一方で、福建省の連家船漁民と甌船漁民がともに廟宇の中で祀っている「媽祖」や「水仙爺」といった神明は、同じ名称で呼ばれても、そこで語られる由来は多少異なることがわかった。

たとえば、連家船漁民たちが祭祀する媽祖は、福建省莆田市の湄州島出身とされ、航海や海上の安全を守る1人の女神である。他方、甌船漁民のあいだで媽祖は「大媽」・「二媽」・「三媽」という3姉妹として祀られ、廟宇にも3体の神像が安置されている。大媽・二媽・三媽の順に、長女（媽祖自身）・次女・三女を表すという。さらに、この3体の神像がこの廟宇へ至った経緯からは、中国特有の歴史事情がうかがえる。もともと媽祖三姉妹の神像は、汕尾港に浮かぶG島の海辺に安置されていたという。甌船漁民たちは、出港と帰港の際に必ずG島の媽祖三姉妹の前を通り、豊漁と航海の安全を祈ったという。その後、Y新村に土地を得得からも、漁民たちは漁に出るたび、ここを通っていた。しかし、1960年代に迷信打破運動が始まると、媽祖三姉妹の神像が燃やされることを危惧した漁民たちによって、それらの神像は当時革命とは無縁だった香港へ運ばれた。この経緯について詳細を聞く余裕がなく、どのような関係をたどり、香港のどこへ運ばれたのかわからないが、ともかくにも、媽祖三姉妹の神像は文化大革命の時期を無事に過ごすことができたのである。その後、各地で廟宇が復興し始めた1992年になって、媽祖三姉妹は香港から甌船漁民たちの元へ戻り、現在の廟宇が建てられた後に、ほかの神明とともに安置されることになったという。

水仙爺は水仙（尊）王とも呼ばれ、福建省の連家船漁民も甌船漁民も、村に建てられた廟宇の主神として祀っている。連家船漁民のあいだで水仙爺は戦国時代の楚の政治家であり詩人でもあった屈原が転化して水神となったものと考えられている。これに対して、甌船漁民たちによれば水仙爺とは、夏の国を開いた帝王とされる禹が神明となったものであるという。禹は大洪水を治めた大功をもつことから、水上の安全を司る神明となったと考えられているようである。

これまで福建省南部の河川下流域に位置する漁村でしか調査をしたことのなかった私にとって、汕尾港という大規模な海港を根拠地としてきた甌船漁民たちと出会えたことは、大きな収穫であった。とりわけ、福建省で連家船漁民と呼ばれる人々と、甌船漁民たちをとり巻く環境には共通する点も多く、それゆえに両者のあいだにある差異も引き立つという発見があった。たとえば、連家船漁民と甌船漁民はいずれも閩南方言を話す人々であり、共同で祭祀される神明には共通点もあった。また、どちらも陸上に定住する際、農村部ではなく比較的繁華な市街地にその根拠地を得て、現在でも漁業に従事する人が少なくないという点も似ている。しかし、詳しくみると、同じ名称、似通った発音で語られ、性格や誕辰も同じにみえる神明が、異なる由来をもつことなどがわかった。こうした相違を小さなものとして切り捨てず、そこから両者をとり囲む社会についてより広い視点で理解する必要性を痛感した。



写真1 汕尾港



写真2 漁船で船頭公を祭祀する夫婦

ハイデルベルク大学

COE (The Cluster of Excellence) 「グローバルな文脈におけるアジアとヨーロッパ：文化の流れにみる非対称性の変遷」

Alexander Häntzschel・島津 万里子（クラスター事務局）

この度、神奈川大学日本常民文化研究所付置非文字資料研究センターと、私共ハイデルベルク大学のCOE (The Cluster of Excellence) 「グローバルな文脈におけるアジアとヨーロッパ：文化の流れにみる非対称性の変遷」は、研究協力を推進することとなり、学術交流・提携事業に関する覚書を取り交しました。具体的には、シンポジウムへの研究者の招聘、若手研究者の短期交流の促進を計画しています。このうち、第一回目の短期交流として2010年に神奈川大学からの研究者を招聘いたします。その他にも、ニューズレター、研究成果報告書、及びその他刊行物の相互交換を行っていく予定です。

1. クラスターの概要

私共クラスターは、ドイツ政府が国内に世界最高水準の教育研究拠点を形成することを目的に実施する「Exzellenzinitiative (エクセレンス・イニシアチブ)」プログラムに採択され、2007年10月に発足したもので、ドイツ版のグローバルCOE拠点に相当します。

クラスターは4つの研究領域—統治と行政、公共領域、衛生と環境、歴史と文化遺産—に属する70以上の研究プロジェクトにより構成されており、現在200名の研究員がアジア・ヨーロッパ間における文化交流のプロセス—文化、社会、政治等関連諸分野における非対称性—に関する研究活動を行っています。

なお、奨学金の半数は、アジア各国からの優れた若手研究者に付与されています。

2. クラスターの教授陣

クラスターはインド学教授のアクセル・ミヒャエルス、中国学教授のルドルフ・ワグナー、並びに文化歴史学教授のマドレーヌ・ヘレンーオシュの3名の監督の下運営されています。

また、クラスターにはドイツ初となるグローバル美術史教授を始め、文化経済史、思想史、ビジュアル・メ

ディア人類学並びに、仏教学の分野で5名の専任教授が常任しており、学際的な研究環境の中、文化交流学の大学院プログラムの運営も行っています。

3. 今後の取り組み

更に、クラスターは、“Heidelberg Research Architecture” (HRA) と呼ばれる独自の研究用システムの開発を進めています。HRAは、複数の学問分野間の情報交換を促進するための新たな取り組みであり、現在20以上のプロジェクトにより構成されています。様々なデータベースを作成し、コンセプト、テーマ、文献、テキスト、画像や動画等を保存することで、研究者が場面に応じて情報の利用をすることが可能となっています。「多文化画像データベース」はその一例で、現在40,000画像が保存されており随時利用可能です。

その他にも、クラスターは、文章比較や言語資料の引用検索を可能とするツールの開発も進めています。

4. おわりに

今回の学術交流覚書の締結に伴い、両大学の交流が今後、更に緊密となり、より多くの学術情報が活発に交換できるようになることを大変期待しています。



クラスター施設 (ハイデルベルク大学 カール・ヤスバースセンター)



2010年度 センター研究員・研究協力者

センター研究員

名前	所属部局	職名	研究班
福田 アジオ (センター長)	歴史民俗資料学研究所	教授	1,3
橘川 俊忠 (副センター長 / 運営委員<編集担当>)	歴史民俗資料学研究所	教授	2,6
田上 繁 (事務局長 / 運営委員<事務総括担当・編集担当>)	歴史民俗資料学研究所	教授	2
大里 浩秋 (運営委員<研究会担当>)	外国語学研究所中国言語文化専攻	教授	1,5
安室 知 (運営委員<ホームページ・データベース担当>)	歴史民俗資料学研究所	教授	2
金 貞我 (運営委員<研究ネットワーク・資料担当>)	外国語学部国際文化交流学科	准教授	1,3
内田 青蔵	工学研究科建築学専攻	教授	
小熊 誠	歴史民俗資料学研究所	教授	1
北原 糸子	立命館大学歴史都市防災研究センター	教授	4
木下 宏揚	工学研究科電気電子情報工学専攻	教授	2
佐野 賢治	歴史民俗資料学研究所	教授	2
孫 安石	外国語学研究所中国言語文化専攻	教授	5
津田 良樹	工学部建築学科	助教	2,6
能登 正人	工学研究科電気電子情報工学専攻	准教授	4
ジョン・ボチャラリ	歴史民俗資料学研究所 東京大学総合文化研究科超域文化科学専攻	非常勤講師 教授	3
的場 昭弘	経済学部経済学科	教授	1
森 武麿	歴史民俗資料学研究所	教授	
クリスチャン・ラットクリフ	外国語学部国際文化交流学科	准教授	3

研究協力者

何 彬	首都大学東京	教授	3
川西 崇行	早稲田大学教育・総合科学学術院	講師	4
貴志 俊彦	京都大学地域研究総合情報センター	教授	5
君 康道	東京大学大学院総合文化研究科	専任講師	3
小松 大介	歴史民俗資料学研究所	博士後期課程	2
徐 東千	東京大学大学院工学系研究科建築学専攻	博士後期課程	3
高野 宏康	日本常民文化研究所	特別研究員	4
富井 正憲	漢陽大学校建築学部	教授	5
富澤 達三	外国語学部国際文化交流学科	非常勤講師	1
中井 真木	東京大学大学院総合文化研究科	博士課程	3
中町 泰子	元 COE 研究員 (RA)		1
韓 東洙	漢陽大学校建築学部	教授	5
藤永 豪	佐賀大学文化教育学部	専任講師	6
フレデリック・ルシーニュ	歴史民俗資料学研究所	博士後期課程	2
本田 佳奈	佐賀県立図書館資料課		6
マンジャン・アレクサンドル	立教大学ランゲージセンター	教育講師	3
李 利	歴史民俗資料学研究所	博士後期課程	3

- 1 非文字資料研究ネットワーク形成研究
- 2 非文字資料発信システム研究『地域統合情報発信の開発』
- 3 『マルチ言語版絵巻物による日本常民生活絵引』の編纂共同研究
- 4 関東大震災の都市復興過程とそのデータベース化、並びに資料収集
- 5 中国・韓国の旧日本租界
- 6 持続と変容の実態の研究—対馬 60 年を事例として

2010年度 個人研究課題一覧

内田 青蔵	建築図面から見たわが国の昭和住宅史の構築
大里 浩秋	戦前台湾在住日本人関係資料整理
小熊 誠	東シナ海海域地域における非文字資料の比較研究
北原 糸子	災害文化の東西比較及び災害救済の史的研究
橘川 俊忠	持続と変容の文化史
木下 宏揚	非文字資料の著作権管理に関する研究
金 貞我	東アジア図像資料における文化表象研究

佐野 賢治	民俗資料の文化資源化
孫 安石	中国都市史研究—とくに上海を中心に
田上 繁	非文字資料としての近世検地絵図の収集と解析
津田 良樹	海外神社跡地調査研究
能登 正人	非文字情報の収集と解析
福田 アジオ	民俗資料としての名所図会
ジョン・ボチャラリ	絵巻と民間信仰
的場 昭弘	欧州における非文字資料研究現状調査
安室 知	海兵微地形の認識と環境利用に関する研究
クリスチャン・ラットクリフ	中世における和歌の社会的価値と効用

2010年度 奨励研究者決定

研究課題	氏名(所属)
中世絵巻における差別意識の検討—描かれるしぐさを中心として—	内藤 久義 (歴史民俗資料学研究所博士前期課程)
スペインと日本における大学闘争の活動家のイメージ、およびその比較研究 (1945 ~ 1975 年)	サンティアゴ・ロベスハラ (歴史民俗資料学研究所博士後期課程)
中国福建省南部における水上生活者の葬送儀礼とその変遷	藤川 美代子 (歴史民俗資料学研究所博士後期課程)
エルデニオポーとイヘ・ツアイダムオポーの過去と現在— 1958 年を一区切りとして—	白 莉莉 (歴史民俗資料学研究所博士後期課程)

受贈資料一覧(書籍・雑誌) (2009年7月~2010年5月)

タイトル	発行所
愛知学院大学 文学部紀要 第 39 号	愛知学院大学文学会
Printing Museum News 33号~37号	印刷博物館
国家／ファミリーの再構築 人権・私的領域・政策 国際移動とく連鎖するジェンダー— 再生産領域のグローバル化 少子化とエコノミー パネル調査で描く東アジア テクノ／バイオ・ポリティクス 科学・医療・技術のいま 欲望・暴力のレジーム 揺らぐ表象 / 格闘する理論	お茶の水女子大学 21 世紀 COE プログラム 「ジェンダー研究のフロンティア」
Reflection 第 4 号, 第 5 号 (日本語版、英語版、中国語版、韓国語版)	関西大学文化交渉学教育拠点
MUC 京都外大国際文化資料室紀要 5 号, 6 号	京都外国語大学国際文化資料館
市民社会と責任	京都大学大学院 法学研究科
世界を先導する総合的地域研究拠点の形成 (DVD) 京大式 フィールドワーク入門	京都大学東南アジア研究所
八代市文化財調査報告書 第 43 集 八代妙見祭	熊本県八代市教育委員会
Integration of Comparative Neuroanatomy and Cognition 近代的心性における学知と想像力 句題詩研究 古代日本の文学に見られる心と言葉	慶應義塾大学 21 世紀 COE 心の統合的研究センター
神女大史学 第 26 号	神戸女子大学史学会
日本思想文化研究 第 2 巻 第 2 号	国際文化工房
測量臺灣	國立臺灣歷史博物館・南天書局有限公司



小諸市史 近・現代篇 小諸市史 歴史篇(二) 小諸市史 歴史篇(三) 近世史	小諸市教育委員会 生涯学習課
人間文化 Vol.27	滋賀県立大学人間文化学部
平成 16 年度－ 20 年度 最終活動報告書	静岡大学 21 世紀 COE プログラム「ナノビジョンサイエンスの拠点創生」
西北民族研究 61 ～ 64	西北民族大学
民族語文 2009.3 2009.4	中国社会科学院民族学与人類学研究所
中国歴史文物 第 82 期～第 85 期	中国歴史文物 編集部
対馬国史 第 1 巻 原始・古代編 対馬国史 第 2 巻 中世・近世編 対馬国史 第 3 巻 近代・現代編	「対馬国誌」刊行委員会
Wind Effects Bulletin 12 号,13 号	東京工芸大学 グローバル COE プログラム 「風工学・教育研究のニューフロンティア」
Wind Effect News 22 号～ 24 号	東京工芸大学工学研究科 風工学研究センター
東京大学史料編纂所付属 画像史料解析センター通信 第 45 ～ 46 号	東京大学史料編纂所付属 画像史料解析センター
かわら版・鯉絵にみる江戸・明治の災害情報－石本コレクションから	東京大学附属図書館
宗教国家アメリカの現在 vol.3 (DVD)	同志社大学 神教学際研究センター
東アジア出版文化研究－にわたり	東北大学 東北アジア研究センター
災害と資料 第 3 号	新潟大学
雙松通訳 Vol.11 ～ Vol.12 日本漢文学研究	二松学舎大学日本漢文教育研究プログラム
展示学 第 47 号	日本展示学会
イコム大会報告書 (第 19 回スペイン バルセロナ大会)	財団法人 日本博物館協会
Perspectives on Korean Dance	Van Zile (著者による寄贈)
資料室ニュース Vol.39 ～ 40	阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター 資料室
Cultivate No.34	文化環境研究所
無声映画鑑賞会会報 活狂 No.138	マツタ映画社 無声映画鑑賞会
神園 創刊号	明治神宮国際神道文化研究所
「科学技術動向」 No.99 ～ No.109	文部科学省 科学技術政策研究所 科学技術動向センター
かいじあむ通信「交い」 13 ～ 17 号	山形県立博物館
詳説 日本史図録	山川出版
生態恒常性工学 持続可能な未来社会のために	横浜国立大学
陸の道と海の道の交差点 ー江戸時代の神奈川	横浜市歴史博物館
日本の民俗学「野」の学問の二〇〇年	吉川弘文館
写真集 関東大震災	吉川公文館
京都歴史災害研究 11	立命館大学歴史都市防災研究センター
李文信考古文集 遼寧省博物館学術論文集 第三集 (1999-2008) 第 1 冊 遼寧省博物館学術論文集 第三集 (1999-2008) 第 2 冊 遼寧省博物館学術論文集 第三集 (1999-2008) 第 3 冊 遼寧省博物館学術論文集 第三集 (1999-2008) 第 4 冊 遼寧省博物館 館刊 2009	遼寧省博物館
写真展 下町の記憶 アマチュアカメラマン加藤益五郎が写した風景	早稲田大学芸術学校

主な研究活動

運営委員会

2009 年度

第 8 回	12 月 16 日	センター長の選任、2009 年度訪問研究員の受入れ、2009 年度派遣研究員のガイダンス 他
第 9 回	1 月 22 日	研究協力者の委嘱、2009 年度海外提携機関からの訪問研究員の受入れ 他
第 10 回	2 月 15 日	2009 年度予算の再配分、2009 年度事業報告、2010 年度事業計画 他
第 11 回	3 月 24 日	海外提携機関との覚書の締結、2010 年度研究担当者人事、2010 年度運営委員会の構成 他

2010 年度

第 1 回	4 月 21 日	2010 年度研究員人事、2010 年度予算配分(案)、2010 年度研究体制、2010 年度事業計画、2010 年度海外提携機関との招聘・派遣募集要項、2010 年度奨励研究募集要項、ニューズレター No.24 の編集方針 他
第 2 回	5 月 26 日	2010 年度奨励研究審査、第二期研究事業計画の策定、関東震災班の公開研究会、展示企画
第 3 回	6 月 23 日	北京師範大学・万建中氏との協議について、2010 年度海外提携機関との研究員の招聘・派遣について 他

研究員会議

2009 年度

第 4 回	12 月 2 日	センター長(任期 2010 年度・2011 年度)の選出、ハイデルベルク大学との覚書の締結 他
第 5 回	1 月 20 日	センター長(任期 2010 年度・2011 年度)の選出、センター要覧 2010 年度版の編集 他
第 6 回	2 月 22 日	2009 年度事業報告、2010 年度事業計画、2010 年度研究担当者人事 他

2010 年度

第 1 回	5 月 6 日	2010 年度研究員人事、2010 年度予算配分、2010 年度研究体制 他
第 2 回	6 月 2 日	2010 年度海外提携機関との招聘・派遣、関東震災班「公開研究会、展示企画」、センター第二期共同研究の策定 他

研究会

研究班

非文字資料研究ネットワーク形成共同研究・研究会 11 月 27 日、2 月 4 日、4 月 9 日、5 月 28 日、6 月 2 日、25 日、30 日
 マルチ言語版『絵巻物による日本常民生活絵引』編纂研究 11 月 25 日、12 月 9 日、16 日、1 月 13 日、2 月 2 日、17 日、3 月 8 日、4 月 14 日、5 月 12 日、19 日、6 月 9 日、16 日、23 日
 関東大震災の都市復興過程とそのデータベース化共同研究・研究会 12 月 7 日、9 日、18 日、22 日、1 月 12 日、15 日、20 日、28 日、2 月 8 日、11 日、13 日、15 日、25 日、3 月 3 日、10 日、12 日、18 日、26 日、4 月 7 日、14 日、26 日、27 日、5 月 10 日、20 日、26 日、6 月 2 日、8 日、18 日、25 日
 海外神社研究会 3 月 6 日

現地調査

調査テーマ	日程	場所	調査メンバー
非文字資料研究ネットワーク形成研究のための情報収集	3 月 2 日～ 3 月 4 日	京都・奈良・神戸の各機関	福田アジオ、金貞我、富澤達三
	3 月 29 日～ 3 月 31 日	韓国(ソウル) Sung Sil 大学、キリスト教博物館	金貞我
『マルチ言語版絵巻物による日本常民生活絵引』の編纂共同研究	3 月 26 日～ 3 月 28 日	米沢 上杉博物館	金貞我
	6 月 4 日～ 6 月 6 日	京都・奈良 博物館	金貞我
関東震災後の都市復興過程とそのデータベース化、並びに資料収集	5 月 6 日～ 8 日	京都	高野宏康
	6 月 11 日～ 12 日	京都	高野宏康
非文字資料発信システム研究『地域統合情報発信の開発』	2 月 2 日～ 4 日	只見町	フレデリック・ルシーニュ、小松大介
	3 月 23 日～ 24 日	只見町	橘川俊忠
持続と変容の実態の研究 ー対馬 60 年を事例として	3 月 8 日～ 11 日	対馬	橘川俊忠、津田良樹、本田加奈
中国・韓国の旧日本租界	3 月 15 日～ 20 日	中国(大連)	大里浩秋、孫安石、富井正憲

編集後記

本年は、当センターが発足して 3 年目になる。3 年計画で実施してきた各研究プロジェクトも成果をとりまとめる段階に入った。その成果は、いずれ成果報告書、展示、シンポジウム、年報など、様々な形で発表することになる。非文字資料研究を少しでも進展させる内容とすることを期している。また、センターの活動のもう一つの柱である若

手研究者の育成や海外研究機関との交流などの面でも、COE の成果を引き継ぎ、ある程度発展させることができた。本号に掲載した、訪問・派遣研究員の報告は、その成果の一端を示すものである。センターは次の 3 年に向けて新しい研究計画を策定する作業を開始したが、その内容は次号において公表する予定である。

神奈川大学非文字資料研究センター 2010年度 第1回公開研究会 「関東大震災を描く -絵巻・漫画・子どもの絵-」

参加
無料

- 日 時:2010年10月30日(土) 10:30 ~ 16:00
- 会 場:神奈川大学横浜キャンパス 23号館203教室
- プログラム:
【第1部 報告(10:30 ~ 11:30)】
高野宏康(神奈川大学非文字資料研究センター研究協力者)
「震災絵巻『発見』の経緯と東京都慰霊堂収蔵庫の資料」
北原糸子(神奈川大学非文字資料研究センター研究員)
「萱原白洞『東都大震災過眼録』について」
【第2部 講演(13:30 ~ 16:30)】
片倉義夫(漫画資料室MORI主宰)
「画家・漫画家のみた関東大震災
-竹久夢二、麻生豊、柳瀬正夢-」
井出孫六(作家) 「権の画家 柳瀬正夢」
新井勝紘(専修大学教授) 「子どものみた関東大震災」
及部克人(武蔵野美術大学名誉教授)
「阪神・淡路大震災共同布絵づくり」

お問い合わせは、非文字資料研究センター TEL:045-481-5661(内線3532)

神奈川大学非文字資料研究センター 2010年度 第1回公開展示 「関東大震災を描く -絵巻・漫画・子どもの絵-」

入場
無料

- 期 間:10月22日(金) ~ 11月1日(月)
※24日(日)休室
 - 場 所:神奈川大学常民参考室(3号館)
 - 主な展示品:
・ 萱原白洞『東都大震災過眼録』全3巻
・ 片倉義夫氏蔵 柳瀬正夢震災漫画作品、その他の震災漫画
・ 阪神・淡路大震災布絵
- ※詳細は1ヶ月前にホームページに掲載予定

お問い合わせは、非文字資料研究センター TEL:045-481-5661(内線3532)

神奈川大学非文字資料研究センター 2010年度 第2回公開研究会 「中国・朝鮮における租界研究の今(仮題)」

参加
無料

- 日 時:2010年11月26日(金) 10:00 ~ 17:00
 - 場 所:神奈川大学横浜キャンパス 1号館 308会議室
 - 内 容:
昨年開いた上海・仁川でのシンポジウムに引き続き、中国・台湾・韓国の研究者とともに、最新の研究成果について報告・討論します。
- ※詳細は1ヶ月前にホームページに掲載予定

お問い合わせは、非文字資料研究センター TEL:045-481-5661(内線3532)

神奈川大学国際常民文化研究機構 「国際常民文化研究機構年報」第1号

- 2010年8月中旬発行予定 A4版
- 発 行:神奈川大学国際常民文化研究機構
- 内 容:
【事業編】
・ 事業の年間状況報告等
【論文・研究ノート・調査報告編】
・ 「モノをめぐる洪澤敬三の構想力
-経済と文化をつなぐもの」(原田健一)
・ 「民具の標準名設定の一試論
-「会津農書」の民具と照合を例に-」(佐々木長生)
・ 「民俗学における漁業民俗の研究動向」(中野泰)
・ 研究ノート:
「環太平洋海域の伝統的船舶技術の交流について
-小笠原・八丈島のカヌー漁船を題材に-」(後藤明)
・ 調査報告・史料紹介:
「島根県『美保関漁場慣行調査書』」(伊藤康宏)
【プロジェクト共同研究活動報告編】
【共同研究「アジア祭祀芸能の比較研究」報告編】

お問い合わせは、日本常民文化研究所 TEL:045-481-5661(内線4358)

神奈川大学歴史調査報告第9集 下市之瀬の民俗 -山梨県南アルプス市下市之瀬-

- 2010年3月25日発行 A4判160ページ
- 発 行:神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科
- 内 容:
山梨県南アルプス市下市之瀬における民俗調査報告書。
果樹園地帯の村落の民俗を全体的に把握して報告し、あわせて各人の考察論文を収録する。

神奈川大学歴史調査報告第10集 肥前渋江 諸家 文書目録

- 2010年3月25日発行
- 発 行:神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科
- 内 容:
肥前国(長崎県)に所在する渋江姓の諸家に伝わる河童信仰を含む水神関係の文書目録であり、波佐見水神宮、渋江公雄家(大村市)、長崎水神社の3家の文書が目録化されている。

非文字資料研究 No.24

発行日 2010年7月25日発行
編集・発行 神奈川大学 非文字資料研究センター
日本常民文化研究所

Research Center for Nonwritten Cultural Materials,
Institute for the Study of Japanese Folk Culture, Kanagawa University
〒221-8686 横浜市神奈川区六角橋3-27-1

■Tel.045-481-5661 ■Fax.045-491-0659 ■URL <http://himoji.kanagawa-u.ac.jp/>

